

原^{はる} 遺 跡 2

筑紫野市文化財報告書

第 86 集

2006

筑紫野市教育委員会

例 言

1. 本書は、店舗建設に伴い筑紫野市教育委員会が発掘調査した「原遺跡2」の調査記録である。
2. 調査対象地は、筑紫野市大字原420番地1である。事前の確認調査から契約については、長野卓司（当時社会教育課 文化財担当 主査）渡邊和子（当時社会教育課 文化財担当 技師）が行なった。
3. 平成4年度および平成5年度に福岡県教育委員会が、実施した県道筑紫野・古賀線建設に伴う調査を第1次調査とし、この調査を第2次調査として報告した。
4. 調査に係る実測図作成及び写真撮影は、小鹿野亮（当時社会教育課 文化財担当 技師）が行った。
5. 報告書掲載挿図の製図は、(有)文化財テクノアシストに委託した。
6. 挿図中に使用した方位は、すべて国土調査法第Ⅱ座標系で表示した。
7. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

目 次

	頁
本 文	
1. 調査に至る経過	3
2. 位置と環境	3
3. 調査の内容	7
S D (溝状遺構)	8~10
Pit (柱穴)	10
4. 小結	10

Fig. (挿図)

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	1
Fig. 2 遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)	2
Fig. 3 調査地点およびV地点配置図 (S=1/250)	4
Fig. 4 遺構配置図 (S=1/80)	7
Fig. 5 S D実測図 (S=1/40)	8
Fig. 6 S D実測図 (S=1/40)	9

PL. (写真図版)

PL. 1 全景	5
PL. 2 全景	6

表

表—1 SD一覧表	9
-----------------	---

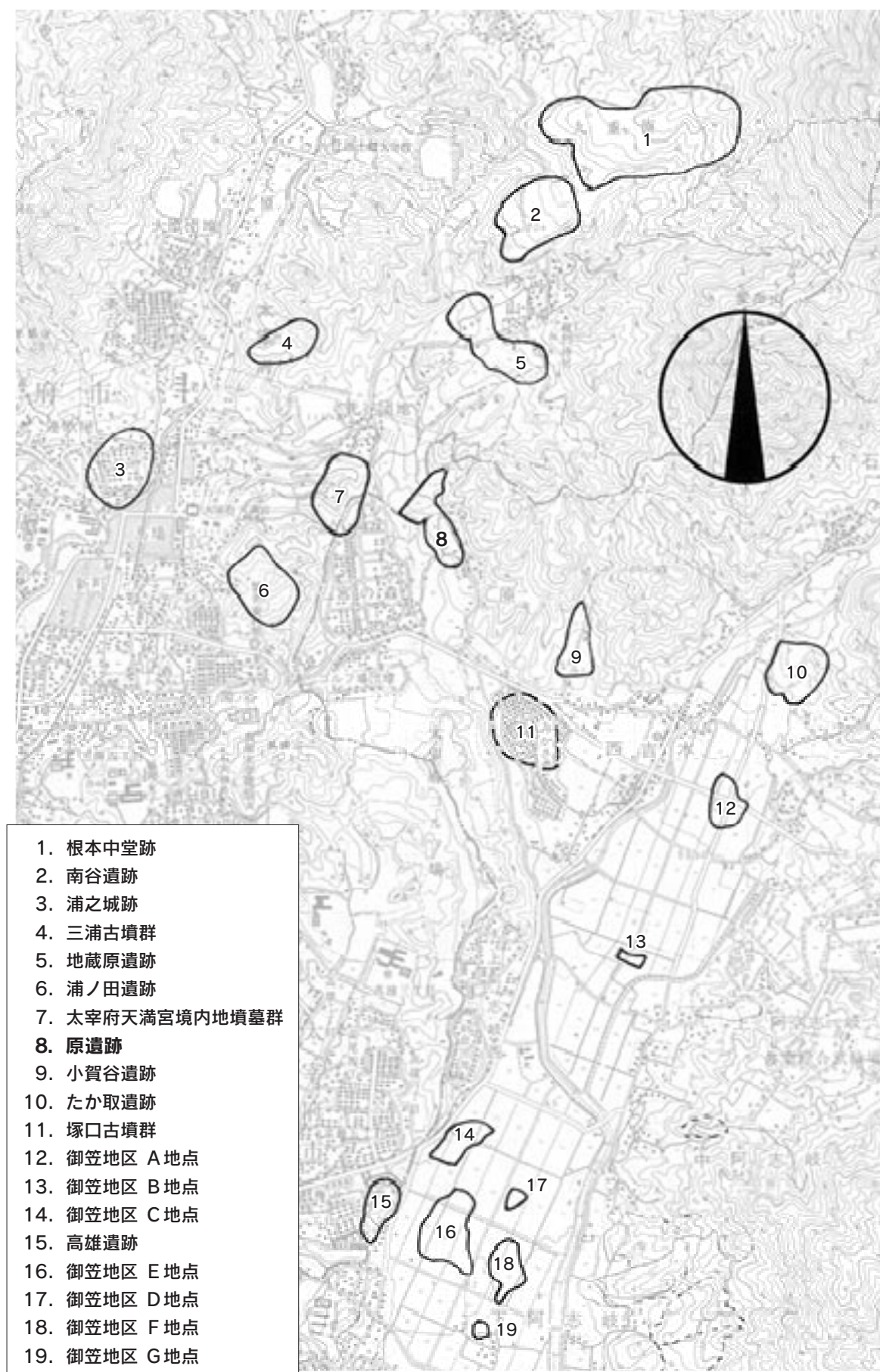


Fig.1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

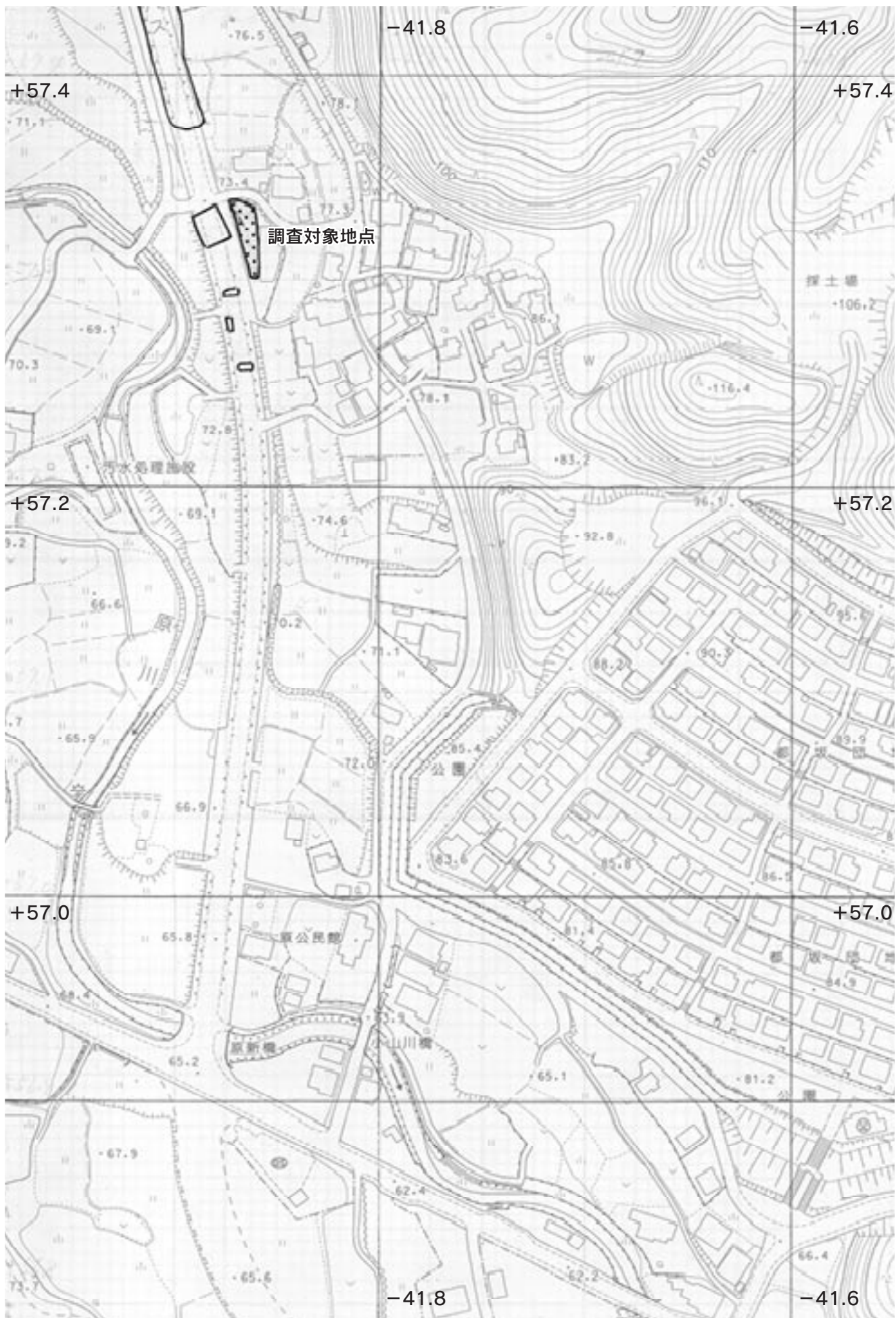


Fig.2 遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

1. 調査に至る経過

平成10年1月23日に筑紫野市大字原420番地1についての都市計画法第32条の協議があった。

対象地は周知の遺跡（原遺跡）に該当するため届出者に周知の遺跡ならびに文化財保護法の説明を行なった。1月29日に「埋蔵文化財の有無」の照会文書の提出が地権者よりなされ、1月30日に確認調査を実施した。確認調査の結果、予定地内に埋蔵文化財が確認できたため、その旨を回答するとともに文化財保護法第57条の2（現第93条）の届出について指導し、2月17日に地権者より提出がなされた。同3月19日に福岡県文化財保護課より第57条の2についての通知があり、ただちに地権者に伝達した。予定地は50～60cmの埋土による造成計画であり大半の遺構は現状保存できると判断されたが、予定地北西側に計画された污水处理関連の一部の工事範囲だけが掘削を伴い遺構の現状保存は不可能であると判断されたために、地権者ならびに届出者と遺構保存についての協議を行った。污水处理に伴う工事範囲についてのみ発掘調査を実施する事で地権者と協議が整い、同3月20日に埋蔵文化財調査委託契約書を締結し、年度内に調査を終了させる行程で計画し、3月25日から3月30日まで調査を実施した。

2. 位置と環境

筑紫野市は福岡県の南西部に位置し、東は嘉穂郡筑穂町、朝倉郡筑前町（旧夜須町）と、西は筑紫郡那珂川町と南は小郡市、佐賀県と北は大野城市、太宰府市とに接する。周辺地形を概観すると南西部の背振山地、北西部の三郡山地帯とに挟まれた狭長な平野部からなり、筑紫平野と福岡平野の接点にあたり、古代から現代までの交通の要衝として重要な位置を占めている所である。

原遺跡は三郡山系から派生した宝満山麓（標高830m）に位置する。この宝満山からは数多くの小河川が流下する。宝満西麓の小河川は御笠川に合流し博多湾へと流れ、また南麓の河川は宝満川へと流れ、さらに筑後川に合流し有明海へと注いでいる。

調査対象地は筑紫野市大字原420番地1に所在し、原川左岸の河岸段丘の低位段丘上標高72m前後に立地する。この原川は宝満山より流下した小河川の一つで、竈門神社のある内山集落付近に源を発する。水量の少ない川であるが、急勾配の様相を見せる河川である。原川はこれまでに幾度かの氾濫を繰り返し、その侵蝕・運搬作用により現在のような河岸段丘の地形を形成してきたものと考えられる。

県道筑紫野・古賀線建設に伴う第1次調査ではⅠ～Ⅵまでの6地点の発掘調査が実施されていて、それぞれⅠ～Ⅵ地点で検出された遺構の時期は、縄文・奈良・平安時代と時期の違うものが検出されている。各地点の発掘では縄文時代の遺物が僅かに出土しているが、総体的に奈良・平安時代の遺構・遺物が多い。そのなかでもⅥ地点のように上層の奈良・平安・中世の時期の遺構に加え、下層には縄文時代草創期・早期並びに後・晩期の遺物と共に遺構が検出された事を特長とする地点もある。県道建設に伴う調査以前は原遺跡から東南へ800mに位置する小賀谷遺跡^{おがたに}だけが知られていた。この小賀谷遺跡は原遺跡と同様に小段丘上に立地し、縄文時代早期の押型文土器が採集されている。また小賀谷遺跡から南500mには、昭和47年（1972年）に「日本窯業史研究所」で発掘調査した塚口古墳群（16基）が知られていだけで奈良・平安・中世の時期の遺物や遺跡は確認できていなかった。これらのことから今回の調査地点には縄文時代の遺構や遺物を包蔵する可能性や第1次調査Ⅴ地点の東側7mで最短距離に位置する事からⅤ地点と同様な時期の遺構が検出されることが予想された。

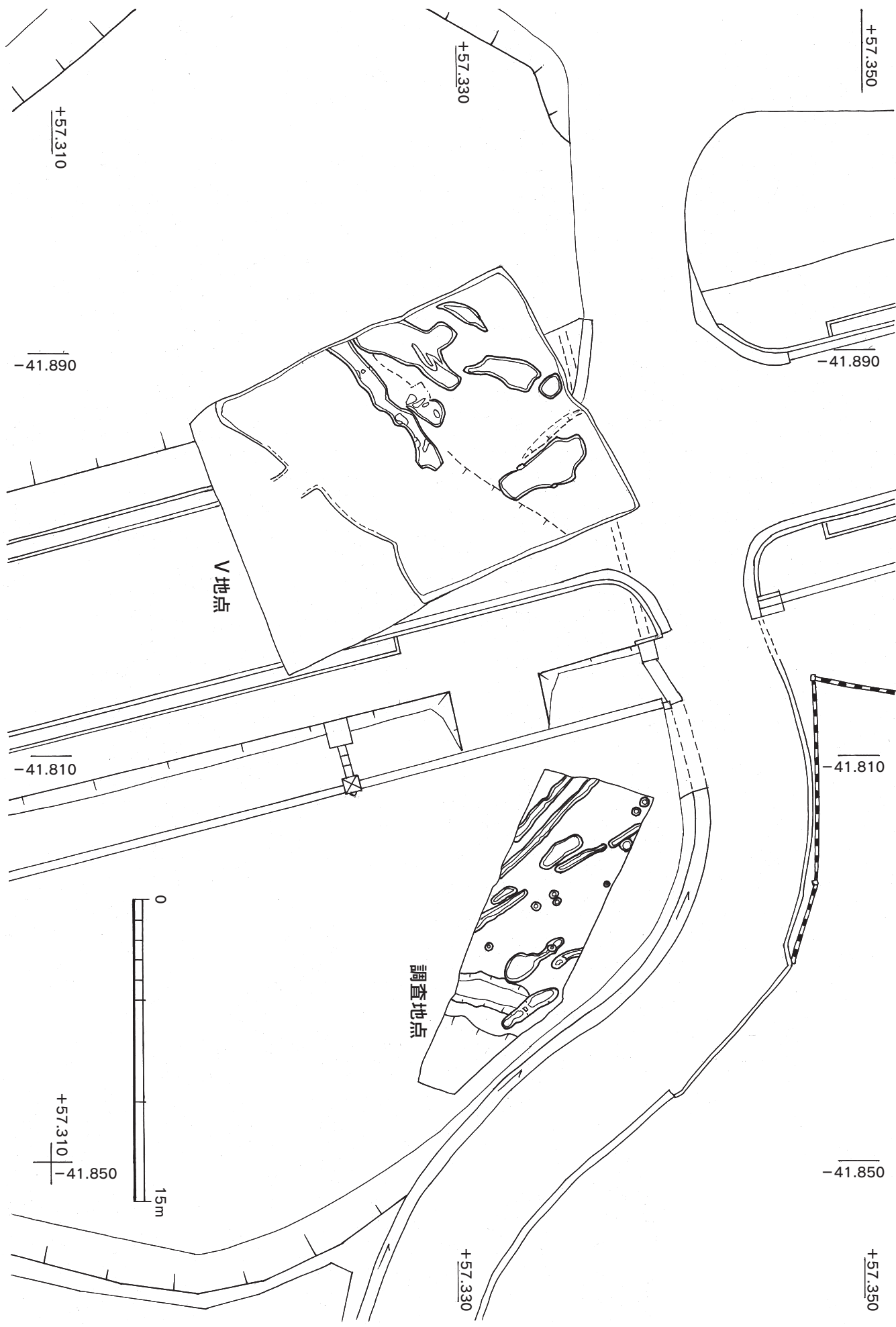


Fig. 3 調査地点およびV地点配置図 (S=1/250)



東南から



北西から

PL.2 全 景



S 1 ～ S 9 付近



S 1 ～ S 5 付近

3. 調査の内容

調査対象地はFig.3で示すように県道筑紫野・古賀線発掘調査V区の東側に位置し、側道部を挟んで最短で9.4m、最長で14.4mの距離に位置している。

対象地内の基本層序は確認調査の所見では耕作土（表土）・床土で、床土直下が遺構面となる。

床土の深さは南側ほど厚く、遺構の数も減少の方向にあった。これは旧地形が南側に向かって緩やかに傾斜している事に起因している。

調査に至る経過で述べたように污水处理建設にかかる掘削部分のみ調査対象とし、現場で検出された遺構全てにS番号を付し整理作業を行なった。

今回の調査区内にはV区に続く遺構は確認されていない。またV区で確認されていた下段のテラスはなく、全面に遺構が検出できた。

調査面積は30㎡で、柱穴8個と溝状遺構10条が検出された。

溝状遺構は不定形なものが多く、遺物はまったく出土せず、遺構の時期確定はできなかった。検出された数条の溝状遺構は、県道部分方向へ延びる様相のものもあるが、第1次調査では検出されていない事を考慮すれば調査区内の溝状遺構は県道側道部付近や対象地内で終息する可能性が推測される。

調査区東側にはSD9に切られた略南北方向に走る溝状遺構らしいものが確認された。他の溝状遺構とほぼ同一の高さから掘り込ま

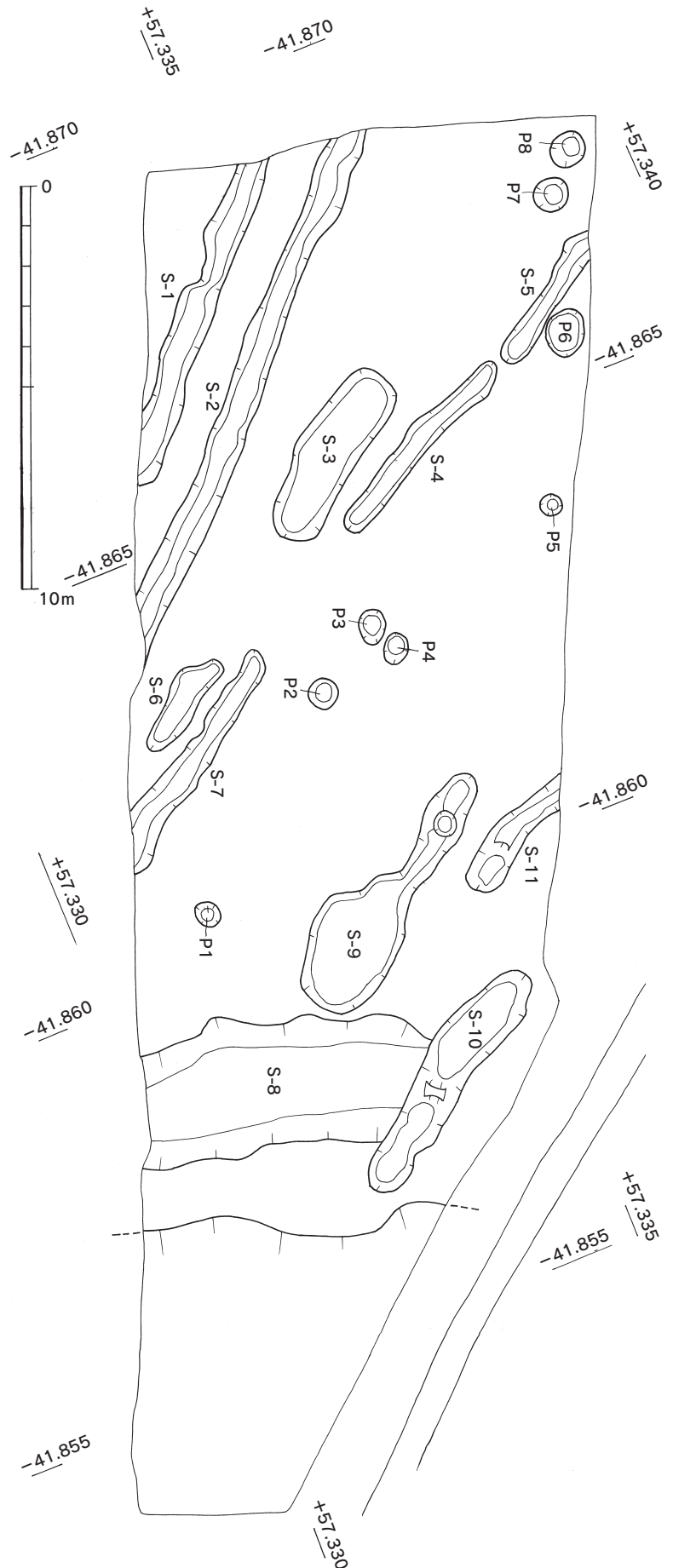


Fig.4 遺構配置図 (S=1/80)

れて二段の肩部を持つ。下段の肩部から底面までは緩やかに落ちる。しかし、土層観察でも堆積土は、溝状遺構の埋土とは考えにくく遺構とはせず地山の落ちとした。

SD (溝状遺構)

SD1 調査区南西側で検出した長さ4.4mの溝で、断面形状U字状を呈し、幅0.30~0.44m、深さ8cm前後を測る。西北西から南南東方向へ直線で伸びている。現状では両端ともに未調査区へ続く可能性もある。南南東方向へは、確認調査のトレンチに同方向の遺構プランが検出できたことから対象地内に続くのは確実であろう。しかし西北西側の県道部分の調査では対象地内と継続しそうな溝状遺構は検出されていないことを考えると西北西側は県道部分までは延びずに終息する可能性が考えられる。

SD2 SD1に並行する。断面形状はU字状だが、平面プランはSD1に比較すると不整形で曲がりくねって狭い所や広いところなどがある。検出長は7.25m、幅0.44~0.46m、深さ6cm前後を測る。未調査区へ続く南南東の上場ラインに折れ点らしいものも見られることから、ここで溝が、略南に方向に変わる可能

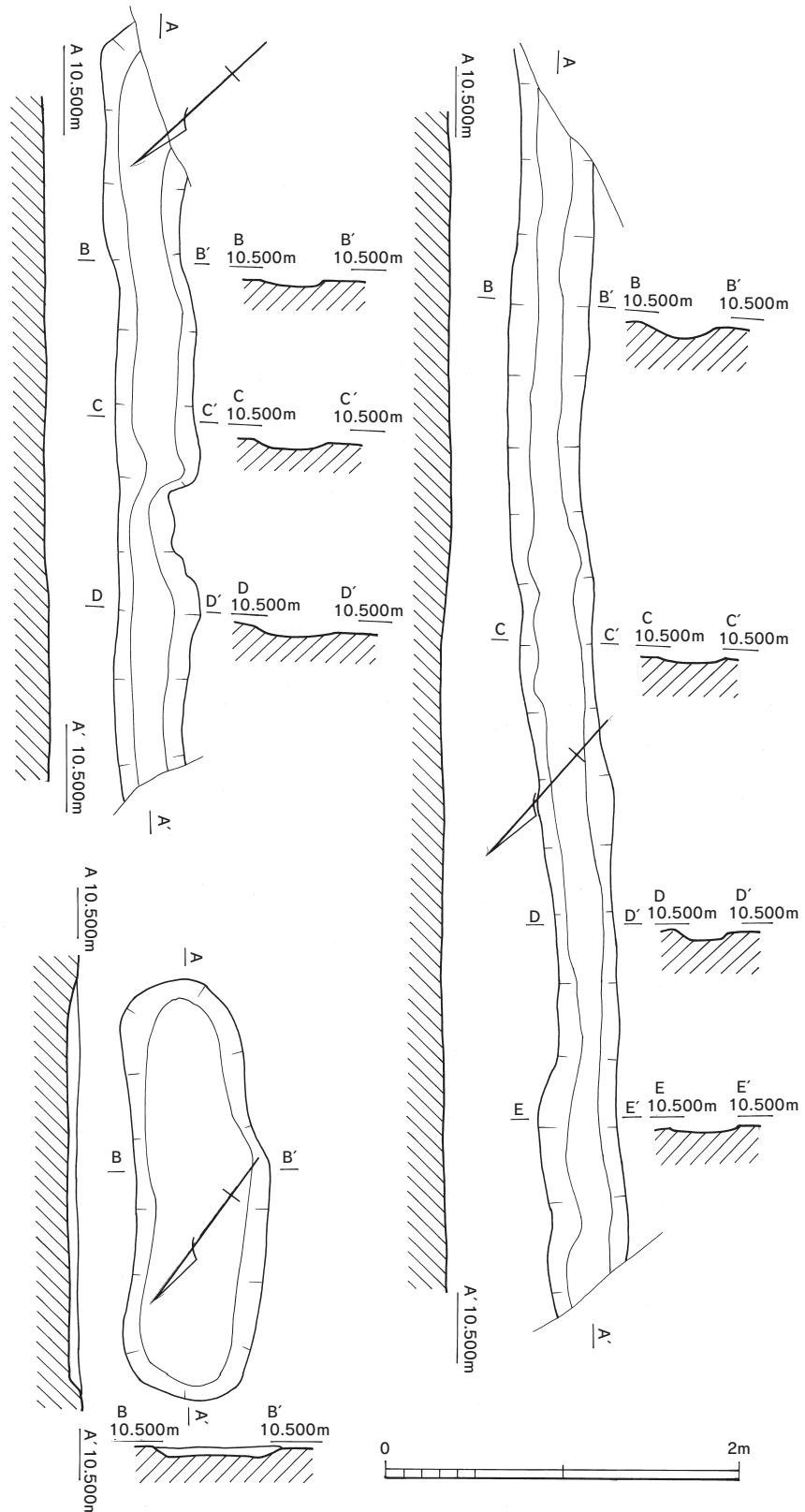


Fig.5 SD実測図 (S=1/40)

性も考えられる。

SD3 SD2の北側で検出。長さ2.35mで不整形な土坑状プランを呈している。単独の土坑とも考えられたが、SD6とした遺構と方向がほぼ一致することを考慮し、SD6との同一の不連続な溝状遺構とした。溝幅の最小・最大は0.5～0.75mで、深さ4cm前後を測る。僅かではあるが南東側の方が深くなっている。形状はSD1・2と比べると幅も広く不整形である。

SD4 SD3の北側に並行して検出された。形状は細長い土坑状を呈し、溝の方向はSD5・7とほぼ同一方向に走る。長さ2.76m、溝幅0.26～0.31mを測るが、深さは3cmと浅く、溝の両端は丸く終息している。溝の中位で西側に曲がり緩やかな「く」の字状となる。個別に番号を付したがSD4・5・7は不連続な同一溝状遺構と考えたい。

SD5 SD4の北側で検出。検出長1.9mで北西側は未調査区へ延びる。溝の形状はやや直線的である。断面形状はU字状を呈し、幅は0.28mで深さ5cmを測る。SD4と近く、SD5の北東端部は終息し丸く収まる。また北東端部はSD4の北西端部と近接し10cm程の隙間しかない。

SD6 SD2とSD7の間で検出された。長さ1.36m、最小幅0.3m・最大幅0.4mを測る。形状は不整形な土坑状を呈し、断面形状はU字状をなす。しかし主軸方向は、SD3とほぼ同じになる。SD3の南東端部からSD6の北西端部は1.7mとやや離れているが不連続な同一の溝状遺構としておきたい。

SD7 SD6の東側に15cm程度の間隔で並行するように検出された。平面形状はSD4・5と同様に細長い土坑状を呈すが、SD4と比べるとやや蛇行している。断面形はU字状を呈し、北西側の端部は丸く終息し、南東側は未調査区へと続く。北西端部とSD4の南東端部との間は1.8mとやや間隔が広い。未調査区との境部分の端部は僅かに屈曲が確認でき、これから曲がるか、あるいは

表－1 SD一覧表

号	断面形状	大きさ (m)			備 考
		長	幅	深	
S1	U字状	4.4+α	0.30	0.050	未調査区へ続く
			0.44	0.087	
S2	U字状	7.25+α	0.45	0.062	未調査区へ続く
			0.38	0.052	
			0.44	0.067	
S3	U字状	2.35	0.76	0.039	
			0.74	0.040	
S4	U字状	2.76	0.31	0.034	
			0.26	0.027	
S5	U字状	1.9+α	0.28	0.054	未調査区へ続く
S6	U字状	1.36	0.39	0.046	
			0.40	0.059	
S7	U字状	3.1+α	0.39	0.025	未調査区へ続く
			0.29	0.023	
S8	U字状	3.19	0.96	0.058	
			0.56	0.070	
			0.33	0.094	
S9	逆台形	3	0.45	0.104	S8を切る
			0.56	0.126	
S10	U字状	1.78+α	0.44	0.152	未調査区へ続く
			0.34	0.131	

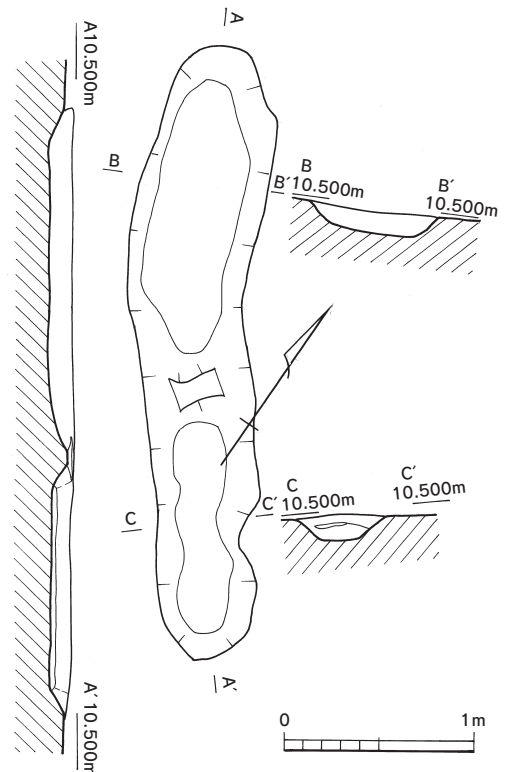


Fig.6 SD実測図 (S=1/40)

は終息する可能性も考えられる。検出長3.1m、幅0.29～0.39mで、深さ2～3cmを測る。これもSD4・5との不連続な同一溝状遺構と考えておきたい。

SD8 SD11の西南側に位置する。検出長3.19mで、北西側は細長く、南東側は不整な卵形の土坑状となり終息し、ラケット状の平面形を呈している。細長い部分の長さは1.6m、幅0.33m前後で深さ9cmを測り、断面形はU字状をなす。中心部に径0.3m程のPitが検出されているが、この溝状遺構に伴うか否かは現状では確認されていない。不整な卵形の長さは1.59m、幅0.56m～0.96mを測る。断面形はU字状をなす。深さは5～7cmで、南側が浅くなっていく。遺構の重複の可能性も考えられるが確認できていない。

SD9 SD8に並行するように検出されSD8を切る。検出長3mを測り、幅0.45～0.56mとなる。断面形状は逆台形をなし、不整な長い土坑状の平面プランを呈している。北西端部より1.6mのところに段があり、重複した二つの細長い土坑の可能性も考えられるが現状では確認できていない。段より北側の幅がやや広く南側の幅は狭い。

SD10 SD8とSD9の間に位置し、SD8・9とほぼ同様な方向に走る。細長い形状を呈し、北側は未調査区へと続く。検出長1.78mで、幅0.34m、深さ13.1cmを測る。しかし南側の終息部分は幅0.44mで僅かに広がりを見せる。ここも遺構が重複した可能性が考えられるが確認できていない。

Pit（柱穴）

検出されたPitは8個で、径30～50cm前後で深さ5～20cm前後の法量のものが主に検出された。また検出したPitには規則性はなく建物跡として纏まるものもない。

4. 小 結

今回の調査は、極めて面積の狭い範囲であったために遺跡総体の性格を見出すことはできなかった。検出された遺構も溝状遺構が中心で、しかも遺物の伴ったものは検出されず時期の確定も全くできていない状況にある。

今回検出された遺構を近くで調査された1次調査V区（以下V区）で検出された遺構と比較すると、V区では遺物を伴うとは言え、遺跡を構成する遺構としては曖昧さの残るものが主体である。

調査区内で検出された遺構は溝状遺構が主体で、しかも同方向に向いている。しかし第1次調査区の方角には続かない。試掘調査でも溝状遺構は東南方向へ広がりを見せるとともに、同方向に走る数条の溝状遺構の存在が確認されている。

このことからV区と今回の調査地点は性格の異なるものと考えられ、調査地点の遺跡の主体は東あるいは東南側にあるものと推測される。

報告書抄録

ふりがな		はるいせき2						
書名		原遺跡2						
副書名								
巻次								
シリーズ名		筑紫野市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第86集						
編集者名		渡邊和子						
編集機関		筑紫野市教育委員会（教育部・文化財課 文化財担当）						
所在地		〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1 TEL.092-923-1111(代)						
発行年月日		西暦2006年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はる 原	ちくしのし 筑紫野市 おおあぎはる 大字原	176	338	33° 00' 01"	0° 00' 00"	1998.3.25 ～ 1998.3.30	30m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
原	集落	不明		溝状遺構		なし		

原 遺 跡 2

筑紫野市文化財調査報告書

第 86 集

平成18年3月31日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111(代)
FAX 092-923-9644

印 刷 信 光 社 印 刷 (有)
福岡県朝倉市一本32-1